

 書評

富岡詔子, 小林正義 編

作業療法学全書(改訂第3版)第5巻 「作業治療学2 精神障害」

野中 猛

日本作業療法士協会が企画・編集した「作業療法学全書」シリーズの中の1冊であり、「作業治療学2 精神障害」と名づけられている。わが国の作業療法学および作業療法実践を支え、作業療法士の育成に一生を賭している方々の記述であると思うと、読むにも身が引きしまる。とはいっても、養成校や大学の学生を读者の対象としているので、項目は厳選され、内容は平易に表現されている。作業療法や作業療法士の世界を知る目的で読むことも可能であろう。ひとつの職種を統括する協会が編集しているのだから、作業療法士自身が大切にしている理念や理論がここに結実している。

わが国で理学療法士・作業療法士が誕生した1965年頃に、「作業療法」の教科書は Willard & Spackman であり、教育の一部は英語で行われていた。日本の作業療法学が体系づくられたのが1990年、次いで1999年に改訂版を出し、今回2010年は第3改訂版となっている。

作業療法士の歴史に始まり、現在の機能、そして将来への展望が描かれている。おそらく人間としての活動がはじまるのと同時に、作業による癒しは存在していたであろう。誰に教わることもなく、我々はごく自然に自分の作業療法を行う。根源的な活動である分だけ、意識的に定義し、科学的な根拠を見いだすことが難しい領域である。人と人がともにあることの癒し効果と同様に、人が何かをすることの癒し効果は、あたり前すぎて、客体化しにくい。

第1章に置かれた作業療法の歴史と位置づけに関する記述は圧巻である。改訂第3版で

はこの部分が充実した。精神保健をめぐる、古代世界から現代まで、西洋から東洋まで、作業療法の視点で見直しをしている。故秋元波留夫氏による『新作業療法の源流』(三輪書店, 1991)の共著者である富岡氏の労作である。

テキストを構成する作業にたずさわった者であれば誰もが難しさを感じるであろう目次構成に注目したい。全書全体では「地域作業療法学」が加わった。精神科病院の奥底で手作業や内職仕事をするのが作業療法とイメージしているとすれば、まったくの誤解である。日常生活の場で生活活動を分析し、生活の質を向上させようというリアル・オキュペーションも目指される。日本作業療法士協会では5か年計画のスローガンとして、作業療法士の半分は病院で活動し、半分は地域生活支援の場に配置したいと願っている。

本書では疾病性の記述が相対的に少ないことに気づく。作業療法士の視点は作業活動の分析であり、作業活動を媒介にした生活支援だからである。しかし、作業療法士特有の視点を他の職種に伝えることを目的とすると、対人サービス専門職に共通する部分が多くて、作業療法特有の視点を選びだすには難しいかもしれない。むしろ本書に刺激されて、精神科医が近く作業療法士と語り合っていただくようになれば、著者一同の喜びとなろう。

(日本福祉大学)

●B5 380 頁 2010 定価 3,990 円(本体 3,800 円+税) 協同医書出版社